



Title	<書評>並木誠士著『日本絵画の転換点 酒飯論絵巻 : 「絵巻」の時代から「風俗画」の時代へ』
Author(s)	多田羅, 多起子
Citation	デザイン理論. 2018, 72, p. 124-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70576
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評 並木誠士著『日本絵画の転換点 酒飯論絵巻

—「絵巻」の時代から「風俗画」の時代へ—

昭和堂 2017 163頁

多田羅多起子 京都造形芸術大学

酒好き、ご飯好き、両方ほどほどにという主張を持つ三者が自論を展開し優劣を論争する、「酒飯論絵巻」という絵巻がある。現存作例だけで模本や類本が多数存在することから、画題が広まり、写し継がれたことがわかる。酒好きの登場人物・造酒正糟屋朝臣長持の部屋で開かれる底抜けに楽しそうな宴会や、ご飯好きの人物・飯室律師好飯の住坊で漫画のように大盛りのご飯をうれしそうに食べる人々、さらには、酒や肴、あるいは食事や茶の準備をする会席の舞台裏まで作画の範疇に入れる本作は、当時の生活文化をいきいきと描き出す。しかしながら、美術史の研究対象として「酒飯論絵巻」が取り上げられた歴史は浅い。近年ようやく光を当てられ始め、研究書の出版が相次ぐ本テーマに関して、著者は長年取り組んできた。本書は、「酒飯論絵巻考— 原本の確定とその位置付け—」（『美学』177号、1994年）、「酒飯論絵巻と狩野元信」（『美術史』137号、1995年）、「『酒飯論絵巻』再考」（伊藤信博ほか編『『酒飯論絵巻』影印と研究：文化庁本・フランス国立図書館本とその周辺』臨川書店、2015年）と続く一連の論考の結実とも言える。「酒飯論絵巻」を日本絵画の流れの中での大きな転換点に位置する重要作として読み解く、画期的な一冊である。

本書の構成をみてみよう。第I章では、巻頭から順に詞書と画面が紹介され、「酒飯論絵巻」の全体像が示される。第II章は「絵巻の時代」と題して平安時代以降の絵巻の歴史を紐解き、具体的作例を連ねて流れを概観した上で、絵巻という絵画形式における「酒

飯論絵巻」の位置付けを明らかにする。続いて、第III章「風俗画の時代」では、人々の営みを描く風俗表現が、絵画主題の添景的役割から自立し、主題として成立するようになった経緯を追う。具体的には、15世紀から16世紀にかけて盛んに制作された寺社縁起や参詣曼荼羅に描かれる観衆、参拝者の風俗表現や、洛中洛外図で京のにぎわいを演出する人々の描写を、その後に花開く近世初期風俗画のさきがけとして紹介する。そして、ふたたび、第IV章で「酒飯論絵巻」にスポットライトがあてられる。冒頭に触れたように、近年まで「酒飯論絵巻」は詳細に考察されてこなかった。著者は研究史を振り返り、美術史において原本との関係性が議論されないまま、文化史の各領域で数多く存在する模本が使用されてきたこと、一方、美術史研究では、絵巻の研究が平安・鎌倉時代のいわゆる「名品」に集中し、室町時代の絵巻研究が立ち遅れていたことなどを指摘する。ここで著者は改めて、一連の「酒飯論絵巻」の原本は現存作例の中で最も古様を示す文化庁本《酒飯論絵巻》であり、1520年代に狩野元信が描いたものとして論を進める。最後に、《酒飯論絵巻》を「絵巻」としてみたとき絵画がテキストから独立していること、「風俗画」としてみたとき同時代が活写され、画面で起こっている主な出来事の舞台裏まで描かれていること、《酒飯論絵巻》の図様が後世への規範性を持ち、多くの作品に引用されていることという3点から、その特質を分析する。結論として、《酒飯論絵巻》を「絵巻」の時代と「風俗画」の時代の潮目に位置する重要作とするのであるが、見てい

るだけで楽しい絵巻の紹介から入り、絵巻の歴史、風俗画の歴史をダイジェストで辿った後、最後にすべてがつながる結論が示されるという構成は、さながら、伏線が回収される推理小説のようである。「酒飯論絵巻」について深く知り得るだけではなく、絵巻と風俗画の歴史を、通史的に把握することができるのもうれしい。中盤に収録された絵巻・風俗画、双方の関連日本美術年表も必見である。

本書の鍵のひとつとなるのは、テキストからの絵画の自立である。「絵巻」は元来、物語と絵画の親密な関係によって成り立つ形式である。例えば、《源氏物語絵巻》(徳川美術館、五島美術館蔵)は、源氏物語をよく知る鑑賞者を想定して作られている。絵巻を手にする鑑賞者は、物語から抜き書きされた詞書を読んで場面のイメージを膨らませ、続く絵画部分に描かれた空間に入り込むように味わい、登場人物の心情を追体験する。あるいは、《信貴山縁起絵巻》(朝護孫子寺蔵)や《伴大納言絵巻》(出光美術館蔵)においては、横に長く続く絵巻の形式を活用したいきいきとした絵画表現とストーリーの流れを一体のものとして楽しみ、巻を描く能わざる物語の展開を楽しむ。いずれの場合も、物語が絵画イメージを膨らませ、絵画が物語を支えるという不即不離の関係にあり、それこそが絵巻の特性、魅力であるとも言える。

ところが、「酒飯論絵巻」の場合、詞書に書かれる三者の主張——酒好き、ご飯好き、両者ほどほどにというそれぞれの言い分——が、忠実に絵画化されているわけではない。詞書では、論者それぞれが古今の文献を引用しつつ、自説の優位性を主張しあうのであるが、絵に描かれているのは、飲食をめぐる光景、つまり、宴席での人々の姿や、飾り付けを含めた室内の様子、料理された飲食物、台所で準備の様子などである。「絵巻」という形

式をとってはいるが、物語、テキストとの親密さは薄れ、当世風俗の活写に力点が置かれている。和歌や物語からの絵画の独立という変化は、本作品に限らず、この時期の大きな動きである。詳しくは著者の別著『絵画の変——日本美術の絢爛たる開花』(中公新書、2009年)を参照されたい。

図様という点では、《酒飯論絵巻》がもつ同時代への影響力、あるいは後世への規範性が注目される。調理など食文化を描く図様がそう多くはないという事情もあり、《酒飯論絵巻》の図様が同時代、また後の時代の作品に転用されていく。同じ流派内、同じ絵巻という形式に留まらず、画面形式や流派を超えて引用される様々な事例が紹介されている。近世以前の画家にとって、図様、型の継承は単なる模倣ではなく、前例を踏襲し典拠を示すという意味もつ。原本筆者である元信は、江戸時代初期に刊行された『本朝画史』(狩野永納編)において、漢にして倭を兼ね、天下画工の長になったと評される。狩野派の本分である筆墨重視の漢画に、色鮮やかなやまと絵の表現を加えたという評価である。『本朝画史』編者の永納が活動した時代には、古典復興の美意識の高まりが見られ、永納もやまと絵を学習した作品、あるいはやまと絵主題の作品を多く遺している。同時代の美意識に合わせて自らの作画活動を調整していた永納にとって、元信が成し得たことの意義はとりわけ大きく映ったに相違ない。

「酒飯論」の論争は、単にお酒かご飯か中庸かという問題ではなく、背景に、それぞれの主張者に仮託された仏教諸宗派の対立があることが指摘されている。しかし、そのことをおいても、食事を準備し、会食するという現在と同じ営みをする人々の姿が描かれる絵巻は十分に楽しい。本書を通して、その魅力を存分に味わっていただきたい。